



339  
897



始



339-897



文學博士  
村上專精師演

# 養 論

第二回中越新婦夏季講習會發行

大正  
6. 3. 23  
内交

# 目次

## 理論部

緒論	.....	一
第一章	修養とは何ぞや	一一
第二章	人に修養の必要なる所以	一五
第三章	人に修養の必要なる根本原理(儒教)	一九
第四章	人に修養の必要なる根本原理(佛教)	二三
第五章	修養の分類	
一、	身體に關する修養	三九
二、	藝能に關する修養	四三

目次終

三、知識に關する修養……………四四

四、情操に關する修養……………四六

五、意志に關する修養……………四七

六、最終理想の修養……………四八

修養の實行法……………五一

修養の實行法は大膽にして小心なれ……………六三

修養に志ある者は必ず規律的生活なれ……………七一

修養に志有る者は真正の宗教力に依ること……………八〇

# 修養論

於中越新婦夏季講習會  
文學博士 村上專精師演

## 論部

### 緒論



修養論

近來此修養と云ふ言葉は一種の流行であるが均しく修養と云ふても其人の平常の思想に依て色々の方面から解釋されて居るのである。例へば儒教を學んだ人ならば、儒教を中心として説くが西洋倫理を

(三)  
 學んで居る人は又其思想を中心にして説いて居る、基督教でも佛教でも皆同じことであるが私のお話する修養は佛教を根本として話すのである。

元來、此修養と云ふ語は親鸞聖人も蓮如上人も一語も述べて置かれない、正信偈、御和讃、御文を読んで見ても修養と云ふ語は一つもない隨て僧侶の説教にも此言葉が出て來ない、一切經を讀んだらわざ知らず禪宗の語録でも日蓮宗の書物でも私の讀んだものには一つも見當らない。それなら儒教に説いてあるかと云ふと大學中庸論語孟子の四書や五經を讀んでも見當らないが近頃に至つて修養と云ふ言葉が盛んに用ひられて修養と題する色々の著書さへ出て居るので、今の若い人は目に付き耳に馴れて居やうが私の若い時分には此

言葉が無かつた。斯の如く修養と云ふ言葉は近頃出來たのであるが文字は異つて居ても其意味は遠く釋迦出世の時代から在るので西洋よりも東洋の特色であつた、併し其同じ意味を表はす言葉が異つて居るのである。佛教では修行と云つて居た之が即ち修養のことである、儒教の方では修道と云ひ或は又修身とも云つて居た、それが近來修養と改つたわけである、遠く徳川時代に諸藩の中に設立せられし學校の中には修道館といふやうな名物のものが随分多かつたが今や修行と云つたのでは一般には通じない。

此の如く語は異つても其意味は古くから東洋に用ひられて來たので釋迦如來の五十年の説法は此修養が目的であつたと謂つてもよい、孔子は一生涯「道」を説かれたのも亦此修養を目的としたのであると

謂つてよい、更に一步を進めて言へば佛教も儒教も詮じ詰めた處が唯此修養主義に外ならないのである。

茲に此修養に關して少々協道に入るやうなれど面白い話がある。一体支那は今でこそ困つた國だなどと云はれて居るが昔は偉い國であつた、弘法、傳教、榮西、道元等の書かれた書物を読んで見ると中々文明の國であつたのである、日本が之迄開けたのも支那のお蔭である、佛法が日本に弘まつたのも支那に佛法が弘まつたからである、支那では歴代の皇帝、貴族、官員、學者等が皆佛教を信仰せられたので上下によく弘まつたが、その中でも唐朝の白樂天宋朝の蘇東坡は何れも堂々たる官員であり學者であり又詩文家であつてそれと同時に稀なる佛法の信者であつた。此白樂天も初は佛法を知らな

かつたのであるが之が所謂因縁次第で篤く佛法を信するやうになつたのである、此因縁と云ふのは、白氏が幼少の頃立身出世を目的として學問した甲斐があつて受験の結果登第して杭州の太守に任せられたが日本の知事のやうな役である、そこで命を奉じて杭州へ赴任したが之が抑々佛法を信する因縁で言換ふれば宿善到來であつた。任地に行く迄佛法と云ふ字も知らず勿論本も讀まなければ名僧知識に聞いたこともなかつた白樂天が其地に道林和尚と云ふ名高い禪師の在るのを聞いて、人の信する佛法は自分も一度は聽いて置きたいと云ふ念が萌したので、太守の身分にも拘らず駕を枉げて禪師の寺を訪ねたのである、所化の案内のまゝに中庭に廻ると禪師は幹根錯綜龍蛇の蟠る如き松の大木の上に端然と坐禪を組んで居られたので

直に

禪師、身危険なり

と云ふと松の大木の上から禪師は之に應へて曰く

爾の身危険なること之より太し

と言はれたが之が白居易には判らなかつた、成程松の木の上に居る人から大地に居る者が「お前の身が俺より危いぞ」と言はれたとて其意味が領解できないのは道理である。禪師更に語を繼いで

薪火交々来る豈險に非ずや

と言はれた、此意味は「薪に火の附いたやうな躰を持つて居りながら精神が何處に在るのだ、俺が肉身は危い處に在るが精神は確かな處に停つて居るぞ、大地に在るお前は躰は確かだらうが大切な精神

が安全な處に在るのか」と云ふので居易の急所を一抉りされたのである。

之は「俺は確かに悟つて居るがお前の悟りは如何」かと言はれた處であるが若之を眞宗に引直して云へば「俺は明に金剛堅固の信心を得て安心して居るがお前は如何だ」と押した處である。白居易は和尚の此語を聞いて深く感じたと見えて次に

佛法の大意如何

と問ふた、此心は和尚の前の詰問に會ふて己が心を觀破せられたので如何にも御尤と感じて此問を起したものと見ゆる、處で禪師は如何に之を答へしやと云ふに左の廿字を以て答へたのである、

諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教

之を約めて言ふと「悪いことを止めて善い事をせよ」と云ふのである。それで餘り馬鹿々々しいと思つたと見れて居易は

豈三歳の兒童も尙且之を知るに非ずや

と問ふた、そうすると禪師は

三歳の兒童も能く之を知ると雖も八十の老翁猶以て行ひ難きに非ずや

と答へられた。之が取りも直さず修養なのである。知るは難いことではないが僅なことでも實踐躬行、自分で踐み出して行ふのが困難なので之れをするのが修養である、白居易は之から禪師の門に幾度も歩を運んで篤い佛法信者となつたのである。

依之觀之釋迦一代の説法は悉く修養を勧めたので自力も他力も修

養が必要である。修養は自力臭いで他力には修養が不必要だと思ふのは誤である。天親菩薩は「如實修行」と言はれた法然聖人は「三心四修」と説いて三心を具足するには恭敬修、無間修、長時修、無餘修が必要だと言はれた。

凡そ佛教廣しと雖も、觀やうに依ては皆悉く修養主義であると思つてよい。儒教も其通りで孔子は論語の學而篇に「學而時習之、不亦説乎」と説いてあるが語簡なれども無限の意味が含まれてある。學ぶと云ふのは知ると違ふ、之を習ふと云ふのは行ひ習ふと云ふことで即ち修養と云ふ意味である。論語は隨筆的のもので組織的のものではないが、編輯者が最初に之を掲げたのは此事が大切であると思つて居たからである。又大學には「修身齊家治國平天下」と云



ひ「上天子より下庶人に至る迄一に身を修むるを以て本と爲す」とある、又中庸には「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」とあつて何れも修養が基礎となつて居る。要するに修養は理窟ではなく實行的である、理論主義の物理や化學等と異つて實際に當つて身に行ふべきものである、但し實行主義のものでも理論不必要と云ふ譯には參らぬ、例へば農業の如き又は醫術の如き實際主義のものでも之を理論に訴へて研究すべき必要あつて醫學校の盛なるのみならず又近來各地に於て農學校が多く設立せらるゝを見る、今修養も亦その如く本來實行主義のものなれども之を理論に懇へて研究するの必要があるので今度の講演は理論部と實行法とに分けたのである。

## 第一章 修養とは何ぞや

修養とは何であるかと云ふ定義を下して見ると左の二通りになる、

- 第一 修養は自己固有の天性を發育せんとする人爲的耕作なり、
- 第二 修養は悪習慣を去つて善習慣を養成せんとするを以て其目的とす。

第一に就て話すとき自己固有と云ふのは人は生れ乍らにして天然に肉體と共に具はる性質がある之を固有の天性と云ふ。扱て此固有の天性を其儘に打捨てて置けば有れども無きが如くなつて終ふが、之をよく育てて其性に應じ立派な光明を放つやうにするのが即ち修養である。幾百粒の菊の種や朝顔の種を割つて見ても花と思はるゝも

のが見當らないが播けば菊となり朝顔となつて皆夫々の花を着ける、  
 「年毎に香ふ山櫻、木を割つて見よ花の在處を」で松や杉に櫻の花  
 の咲いた例はないが櫻の花が咲くのは櫻の木ばかりである、去り乍  
 ら櫻の木でも春の陽氣が來なかつたなら千年萬年経つたとて花が咲  
 くものでない。人間も生れた許りの孩兒の時には猫の子と少しも違  
 はない親も知らなければ兄弟も知らないが猫の子を幾ら育てても仁  
 義禮智信が出て來るものでない。併し生れ落ちた當時は猫の子と同  
 じやうでも人間の子は育てれば仁義禮智信を辨へる資質を有つて居  
 る。資質を有つて居るが育てなかつたら畜生同様である否寧ろ畜生  
 に劣る者さへある。金剛石は貴重なものだが之を播いたとて一輪の  
 花も咲かない。茲は吾々の考へなければならぬことで自分が考へ

ずとも子の爲めに考へなければならぬ。

佛教に一切衆生悉有佛性とあるのが此意味だと言つてもよい、之  
 が耕作と同じで米麥蔬菜の實るのは各々米となり麥となり蔬菜とな  
 る天性に人力が加はつた結果である、種が良いからとて手を掛けず  
 に稔るものでもなければ耕作が巧いからとて種を播かずに生へるも  
 のでもない、花莽草木の耕作は教育であり人間の教育は其耕作であ  
 る。己に天性を有つて居る以上之を育てる修養がなければならぬ。

次に第二の定義であるが、孔子は「性相近し習相遠し」と云はれ  
 た、佛教では「薰習」と説いてある矢張習慣のことであるが、併し  
 習慣と謂つても唯今世一期の習慣に非ずして過去現在未來の三世を  
 貫く處の習慣である、若し惡の習慣を重ぬれば所謂地獄に墮ち若し

善の習慣を重ねれば遂に成佛の地位に到達すると云ふのである。此習慣と云ふものは恐ろしいもので戦争に馴れた人は屍山血河も平気で飛超へることが能きるし偷盗に馴れて終ふと人の物を盗んだとて悪いと思はなくなつて来る。善い習慣を付けるのと悪い習慣を付けるのと相違は極端に云へば鬼と佛との差となり普通に云へば善人と悪人との差が生じて来る。蓮如上人も「癖をば笑ふ世の中に美しきは念佛の癖」と云はれたが念佛を申すやうになるのも一つの癖である。修養は良き癖を付けて悪い癖を除き最後の目的は佛教で云ふなら佛、儒教で云ふなら聖人、今日の教育學の言葉で言へば高尚なる人格である。今日價値なき吾れをも價値ある吾となすのが修養の目的で佛道修行と云ふも畢竟之に外ならないのである。

## 第二章 人に修養の必要なる所以

人に修養が必要であると云ふことを言換へれば動物には修養が要らないと云ふことになるのである。苟も人と生れた以上は修養は必然的にやらなければならぬのである。此考は道德的にも宗教的にも大切なことである。

天が之を命じ自然が之を命ずるのである。先づ人間と動物との肉体を比較して見ると動物は自然に發達すべき性質を有つて居る、生れながらにして獨立生活を営むことが能きるのである、生れ落つるなり親の力を借らずに生きて行ける性質を有つて居るのである、動物でも哺乳動物のやうな高等動物になると少しは親の力を借りるが

眞の僅の間で二ヶ月か三ヶ月である、それだから動物親子の關係は子は生んで貰へばそれでよいし親は子を生んで終へばそれで済むので生れた時には親子の關係が切れると云ふても差支ないのである。處が人間は然うは行かない。生れた儘で放つて置かれて育つものではない、近來西洋の思想の輸入と共に人はよく獨立生活と云ふことを口癖のやうに云ふが吾々はどの位の程度迄獨立生活が能きるだらうか、少しく考へて見なければならぬ。親の恩は吾々を生んで貰ふたからではない、育てゝ貰ふたからである「哀々たる父母は吾を生んで苦勞す」と云ふのは眞に事實である之に考及ぶのは日本の忠孝の基礎である、勅語にも「爾臣民克ク忠ニ克ク孝ニ」又「爾臣民父母ニ孝ニ」と最先に孝を掲げてある通り孝は人倫道德の基礎をな

すものである、釋迦も孔子も生れた事を言はれぬではないが最も力説してゐるのは養育の事である。親も亦子を生んだら之から親として子を育てねばならぬと云ふ責任が始まつて來ると思はなければならぬ。今日日本の社會に於て下層社會程早く獨立生活に入るがそれでも十年以上は親の手に育てられて居る、中流社會より上流社會に進むに隨ひ獨立生活を營む迄には廿年三十年を要するのである、肉体のみならず知識に於ても其通りである。處が猫の鼠を捕り蜘蛛の網を張るのは親に教へられたのではない之が本能力である、親に育てゝ貰はずとも獨りで成長が能きるのである、即ち自然發育である。人間は親の力で育てらるゝのだがそれでも死ぬのが多い「老來を待つて念佛を申す勿れ古墳多く是少年の人」。育てゝ貰ふ許りでな

い箸持つことも茶碗取ることも一切萬事親から教へて貰つてそして吾々が稽古して今日の如く自由に飛廻ることが能きるのである。

扱て動物が教へられずに一通りは本能的に能きながらそれ以上の事は幾ら骨折つても能きない、否其骨折ることをすら能きないのである、人間は習はずに何も能きないが習はずに能きたとて偉い譯ではない能きないのは當然なのである。其代り習ひさへすれば何でも能きながら、習はなければ何にも能きず又何も知らないのであるから、習はずに能る動物にも劣る譯である。吾々は修養さへすれば百科工藝何でも能きる素質を有つて居るのであるのが修養の人に必要な所以である。之を言換へれば他の動物は非修養的動物で人間は修養的動物であると云へるのである、それだから動物仲間には宗教道德教育の

機關と云ふものがないが、人間仲間には必ず時相應所相應に宗教道德及び教育の機關が備はつてある。

### 第三章 人に修養の必要なる根本原理(儒教)

私の主として話したいのは次章の佛教に關する方面であるがその順序階梯として之を掲げたのである。

儒教の上に於ては人の性が善であるか悪であるかと云ふ事は大問題となつて居る、西洋倫理では善惡の標準と云ふことが大問題であるが儒教では此点に就ては問題となつて居ないが性の善惡は最も大なる問題となつて居る、之は孟子の説である即ち論語等には此問題に言及してないが孔子が亡くなられて百五十年の後孟子が出で之

を論じた、其後宋儒に至つて漸く大問題となつたが之れを印度の四句分別の法則に依つて大別すると凡そ左の四つに分けることが能きやうと思ふ。

第一 人の性は善なりとする説之は孟子の説で孟子は

「人の性や善なり猶ほ水の下きに就くが如し人に不善あることなし」と言つてある。即ち人の性が善い方面に進みたいと云ふ傾向のあるのは恰度水が自然に低い方に流れるやうなものである、吾々が忠臣蔵の芝居を観て定九郎が悪く奴だ興市兵衛が可愛さうだと思ふのは之が吾々の性が善いからである、「君子は炮厨を遠ざく」と云ふが雞の締殺さるゝ哀しい聲を聞いて誰も愉快だと思ふ人はあるまい。人の性が善なればこそ哀しい音や苦しい聲を聞けば氣持がよいと思は

れないのである。處が之に反對して出たのが荀子の性悪説で、荀子は

「人の性は悪なり其の善なるものは偽なり」と言つてある、之が

第一の説で人の性は本來悪いのであるが悪い事をせず善い事をしやうとするは横着なので、悪い事をすれば人の交際が能きなくなる法律の處置を受けなければならず結局損であると思ふ考から仕方なしに善をなすので即ち偽りである、佛教の方で言へば名聞利養の爲めにするのだと云ふ説である。次が揚子の善惡混合説で

人の性は善惡混す其の善を修すれば即ち善人となり其の惡を修すれば即ち惡人となる。

之が第二の説で人は善惡兩性を混有して居るもので善い方面を育てれば善人となり悪い方面を養へば惡人となると云ふのである

第四 蘇東坡の非善非惡說で、東坡は

人の性は善に非ず惡に非ず其の善惡を論ずるが如き抑々未だ性を知らざる也。

と云ふやうなことを説いて人の性は善だの惡だのと論ずるのは性の何たるを知らないものと行ふことであると云ふのだ。

以上は、人の性が善なるか惡なるかと云ふ問題に就て色々の説あるのを四種に概括したのであるが、此四説何れに就ても修養が必要である。第一の説では性は本來善であるが我欲に妨げられて惡をなすやうになるので人欲の私を取去れば善の本性が発揮するのである即ち修養が必要となるのである。第二の性惡説は性が善ならば修養など要らないが本來惡の性なればこそ最も修養を積まなければ善人

になれない。第三の説では、善惡混合して居ると云ふのだから修養次第で善人ともなり惡人ともなる。第四の蘇東坡の説は本來は善でもなく惡でもないと云ふのだから之も亦修養次第で善にも惡にも何れにもなる、要するに人には如何しても修養は必要なのである。我が佛教は各宗各派の説が多様なること到底此儒教の比ではないが八家九宗と云つた昔から十三宗五十六派に分れた今日迄種々雜多の説は立てゝあるが矢張概括すると以上の四説に分屬せしむることが能きるのである。

#### 第四章 人に修養の必要なる根本原理(佛教)

前章に述べた儒教の説を例にして吾が佛法を候ふとまた之に似た

ものがあるのである、併し乍ら儒教の説は天地六合を語らずと言つてあるが佛教は横に十方、豎に三世と云つて盡十方世界有りと言ふゆる總ての方面を説いてある。又儒教では「論語の中に未だ生を知らず焉んぞ死を知らんや」と云つてあるが佛法は過去現在言ふ迄もなく盡未來際の事迄も説いてあるので勿論一つには出来ぬが併し相似て居るといふこと丈は確である。恰度燐寸の光と太陽の光が似て居るやうなものである。それで、佛法には八萬四千の法門あり、昔で云へば八家九宗今日で云へば十三宗五十六派と云ふやうに宗派の多く分るゝに随つてその説き方が數多くあるが之を引括つて見ると矢張前章に述べたやうに四種に分けて見ることが能きるのである。

### 第一 性善説

釋迦牟尼如來が入滅の時涅槃經に一切衆生必有佛性と繰返し捲返し言はれてあるが、之は鬼でも蛇でも親を殺すやうな大不孝者でも君を弑するやうな大逆臣でも心の奥底には三世十方恒沙の諸佛と少しも變らぬ性が有るといふのである。

起信論等の中には「自性清淨心」と説いてあるのも亦其の意である。例へは何んな者でも素を洗へば綺麗な眞白い心なのであるが煩惱妄想で眞黒となり罪惡で汚れて居るのである。蒙求と云ふ書物に墨子悲絲と云ふことがあつて、墨子が白い練絹を見て涙を流して居たのを見た弟子が何ぞ悲しい事でもお有りかと尋ねると墨子は此糸



は今こそ白いが、やがて何かの色に染まらうが元を尋ぬれば潔い心も人欲の私の爲に染めらるゝのも之と同じいのであると言はれた。同じ人間も染めやう次第で悪くもなり善くもなる、茲が修養である。扱て此説に當嵌まる宗旨は何宗であると云ふと禪宗だと云ふ人があるが成程似寄つて居るが少し不適當である、又眞言、天台何れも適當ではない、此説に相當するのが華嚴宗である、華嚴宗は今より千數百年前に支那から入つた佛教で聖武天皇の時に奈良の東大寺を御建立になつたが之が華嚴宗の本山本寺で、越中にも有らうが全國六十餘州に國分寺を建立された其總本山である。此宗旨の教義は實に廣大無邊であれど此席上でお話する暇はないが要するに光明耀く佛が、吾々の心の中に住つて居らるゝと云ふのである。之を經論に就

て言ふと凡そ實大乘の説は多く此説であると謂てよい。世の中には「無患子三年」と云ふ譬へがあるが素より黒いと極つたものなら三年五年掛つて磨いたとて何の役に立つまいが吾等人間の心に佛の性があるとして見れば之を磨かなければなるまい、磨けば必ず佛性が現はれて来る、然らば何年磨くのかと云ふと三阿僧祇百大劫の間磨かなければならぬ、何でも此間磨いて終に磨き了せた處が即ち佛である。斯くの如きは深遠なる佛教思想であるが之を人生一般の上に應用して稽ふるに吾等は皆生れ乍らにして聖人君子又は智者學匠となるべき性質を有して居るのであるから修練すれば必ず其性が現れ來つて進んでは聖人君子ともなり又は智者學者或は藝術家等となり得るのである。之が修養の根本原理と云ふべきものだ。

第二 性 惡 說

之は前説と正反對で吾々の心が悪いものであると云ふので、經文の上には明かに此説があるとも言ひかぬるが、先づ宗旨で見れば淨土宗又は淨土眞宗の如き本願他力の上に成立せる宗旨は之に當ると言つてよい。親鸞聖人は

凡夫といふは、欲も多く怒り腹立ち羨み妬む心多く暇なくして死する臨終まで消えず失せずと水火二河のたどへにあらはれたりと言はれてあるが、茗荷の子を皮だくと剝いて終へば後に何も残らぬと同様、人の心は罪惡を以て充たされたもので罪惡を取去つて了へば凡夫の心と云ふものは殆んど零であると云ふのが眞宗の坐り

である。即ち吾々が罪惡の結晶体で十惡五逆具諸不善、云ふ事爲すこと唯知作惡で一つも善いことはないと言ふのである。善導大師はこゝの事を

日夜急走急作して頭燃を拂ふが如くすれども總て雜毒の善と名付け虚仮の業と名付け眞實の業とは名付けざるなり

と被仰つてある、頭の上に火が點けば間誤々々しては居られないやうに明けても暮れても善根功徳を修するに努めて居るから罪惡を作る暇がなさうなものであるが、その善根功徳は悉く雜毒と云ふて毒が混つて居り虚假と云ふて皆嘘の善であると言はるゝのである。

然らば吾々の一切の善根は何故に雜毒虚假であるかと云ふと、疑問が起るだらうが、通佛法の教義から云ふと、世間の學問とは違つ

て吾々の心を説いてあるので色々の深甚な謂れがあるが疊んで見ると吾々の心のドン底には己がと云ふものがあるので之を我法二執と云ふ、之が毒である、念佛を唱へる下にも忠孝仁義を行ふ下にも此己がと云ふものが潜んで居る。それを一大阿僧祇、二大阿僧祇を終つて八地菩薩の位になると平等性智と云ふ心に轉じ來たるので吾も人も平等であると云ふ考になつて來る、これが初めて汚れない慈悲心である。それ迄は縱令如何なる善事をなしても三つの汚れがあると云ふので之を三事不清淨と云ふ即ち「己がお前に之を」と云ふやうに能施、所施、施物の三事に執着がある故之を不清淨と云ふのだ、父母に事へるにも「己が斯うしてやるのだ」と云ふ考が離れないやうに一切の善根功德悉く不清淨ならざるはないが、之に反し八

地以上の菩薩となれば此の如き汚れ即ち執着はなくなる依て八地以上の菩薩の善根功德は悉く清淨ならざるはないと云ふことが能きるのだ。

みつの輪清く淨き予裘、受くと思ふなやると思はじ

と云へる歌がある之が即ち三地清淨の意味を詠んだのである。昔、

梁の武帝が初めて達摩に會つた時に「朕寺を建て僧を度す功德如何」と問はるゝと達摩が「無功德」と答へたのも之れである、「此位寺を建てたり僧侶を養成したのだから大に功德がありさうなものだ」と思ふのは有漏の善根、有爲の善根、雜毒の善根である、それだから達摩は「そんな善根は少しも功德にはならない」と答へたのである。吾々が乃至一念一刹那と雖も清淨眞實の心あることなく一事たりと

も無漏清淨の功德は積まれないのである、親に孝を盡し君に忠を盡し世の中に博愛慈善を行ふと雖も皆毒混りである、此有漏雜毒の善根を平等の大慈悲とするのが自力聖道の修行である、然るに有漏の儘雜毒の儘で助かるのが他力の第十八願である、とにかく真宗の教義は凡夫の性を悪なりとして其上に成立せしものである。

### 第三 性の善悪混合説

人の性は善いとも断せず又必ず悪いものとも断せず善悪の両面を含有するものであると説いて居るのが天台と真言の二宗である。吾々の心は恰度圓い球を平板の上に置くやうなもので何方にも因縁次第に轉がつて行くと同じことである、全体日本語にこゝろと云へる

は球のやうにころ／＼轉んで廻るから此名を得たのだと云ふ説がある是れ一應道理あることのやうに思はる。併し他のことは止めにして本問題に移るが此性善悪混合説は宗旨で云へば天台真言の説は之に當ると云つてよい、併し儒教の揚子の説とは同日に論ずべからざるもので彼は小兒の啼を止むるやうな説であるとすれば此れは大人君子を説服する程の價值はあらう、天台宗の十界五具と云ひ真言宗の六。大。無。礙。四。曼。不。離。と云ひ何れも今日世界の哲學を壓する程の高尙圓妙の理論を含んだものである、併し今茲に此れを詳しくお話する暇もないが要するに人の性は善のものと限らず又悪のものとも限らず、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛と云ふやうに吾人本來の面目を尋ぬると善の極致たる佛に成るべ

きものであると共に又悪の極致たる鬼と成るべきもので、彼の  
傀儡子、頸にかけたる玉手箱、佛出さうが鬼を出さうが

の意である、言葉を換へて云ふと吾々の性は善悪何れとも其一方に  
決して居ないのであつて、吾人をして或は善ならしめ或は悪ならし  
むるは天然自然に定まつて居るのではなくして人爲の修養に依て定  
まるのである。恰度金屬が鑄型次第で香爐ともなり花瓶ともなり圓  
子は捏ねる手加減次第で千變萬化を現はすやうなものであるから吾  
々の修養は一時も怠つてはならないと云ふことになるのである。

#### 第四 性の非善非惡說

最後の非善非惡說に該當する宗旨だと思はるゝのは禪宗であるが

此外にも三論法相唯識宗などが之れに當らうかと思ふ。今日、日本  
で眞宗を除いては最も盛な宗旨は禪宗であつて全國に寺の数が二萬  
一千程ある、併し禪宗の教義から言ふと教外別傳のものだと云ひ或  
は以心傳心だと云ひ或は不立文字だと云ふ、既に教外別傳、不立文  
字だと云ふからには口で説くことも能きねば文字で教へることも能  
きぬ、以心傳心、心外無別法で心から心に感じさせるより言ひ現は  
しやうがないとすれば吾人の性が善であるの惡であるのと云ふやう  
な議論をなすべき宗旨ではないのである。昔、靈鷲山で釋迦如來が  
八萬四千の御弟子を集めなされて御説法をなされた時、參聽の御弟  
子が御説法は今始まるかと待つて居るがお釋迦様は何にも口をお開  
きにならないで唯だ花を拈つて御坐つたので皆が變だと思つて居る

と迦葉と云ふ御弟子がお釋迦様の前へ進んで出て莞爾として笑つた、  
するとお釋迦様は

我に 正法眼藏、涅槃の妙心實相無相、微妙の法門、不立文字  
教外別傳あり、摩訶迦葉に付屬す

と被仰つたと云ふことである。真宗のやうに三世十方の諸佛が第十  
八願に就て説かれたのを聞けばよいと云ふのと違ふ、聞けど云ふか  
らには説くのであるが、説くに説かれぬ教外別傳と云ふのが禪宗の  
宗意である、佛も判らねば心も判らない、四辯八音のお釋迦様の口  
でさへ説かれないのである。斯う云ふと一寸妙に聞ゆるが通佛法は  
皆此味ひがあるので天台真言も奥へ行くと矢張説くに説かれなくな  
る、之が聖道自力ばかりでなく他力宗旨でも阿彌陀様とはどんな佛

であるかと聞かれても説明は能きない、拜む阿彌陀如來は木像であ  
るが吾々の精神に頂く阿彌陀様は木像ではない、それが説明能きな  
いから「不思議の佛智、不思議の本願」と云ふのである、此不思議  
と云ふのは吾々凡夫ばかりかと云へば三世十方の諸佛方に至る迄矢  
張不思議と被仰つてある、御和讃に

百千俱胝ノ劫ヲヘテ 百千俱胝ノシタライダシ シタゴト無量  
ノコエヲシテ 彌陀ヲホメンニナホツキジ

と云ふ一首があるが之は阿彌陀經に書いてあるのを現はされたので、  
俱胝は萬億と云ふ意味、劫は長い時間と云ふことを形容した語で四  
十里（六町を一里とす）四方もある石に羅布を三年目に一度づゝ着  
けて其石が磨滅してなくなる迄を一劫と云ふのであるが實は限りの

ないことを云つたのである。それ程の年數をかけて、百千萬億の人が各自に彌陀の功徳を説いても盡きないと云ふことだ、言換へれば説くに説かれぬことを述べてあるのだ。吾々が手近な例を取つて見ても米の味は全く米を食べたことのない人には説明できないと同様に禪宗では不立文字、以心傳心で口でも文字でも傳へることは能きないのである。随つて本。來。無。一。物。と云ふのが禪宗の根本義であると言つてよいのである、果して本。來。無。一。物。ならば善惡の論すべき何物もないので。百丈禪師は

本有之性は名目す可らず本來是れ凡ならず是れ聖ならず是れ垢淨ならず亦空有に非ず亦善惡に非ず

と説かれてある、要するに性は相對的善惡の考を以て見るべきものでないと云ふ意味であるから、性は相對上の善惡を超越したもので、即ち善ども就かず惡ども就かずとするのが禪宗の見方であると言つてよ。

## 第五章 修養の分類

### 第一 身體に關する修養

前段に述べた如く修養と云ふのは生れたまゝに捨て置かず色々世話して育つれば人間以上に尊いものに成れると云ふので主として心の爲めである、併し身と心とは紙の表裏のやうなもので之を分離すべからざる密接の關係を持つて居るのであるから、身體を大事にすることは修養に志あるものゝ最も心掛けねばならぬことである。

身體の修養と云ふのは體を大切にすることで子供の時から弱かつた人でも修養の爲に強くなり小さい躰も大きく肥れて来る、吾々の身體は必ず生れつきと極つた譯のものではないのだ、具原益軒翁の如き吾れ體質薄弱なれば早く死ぬだらうが早く死ねば如何に學問研究しても何の所詮もないからと云ふので衛生の術を學び養生の道を盡されたので壯健の身となられ八十五歳の長命を保たれた、又重野安釋博士の如きも青年時代は頗る虚弱性の人であつたと云ふが中年以後は見違へるやうな健康体の人と成られ八十四歳迄壯健に生きて居られた。東京に生れた人は脚の修養訓練が足りないからものゝ三里も歩けまい、獨り脚のみではない、手も目も耳も皆修養次第に發達するものである。身體の訓練は体格の強壯は謂ふ迄もないが其の他

に敢爲、勇氣、活潑、忍耐、壯快などいふやうな堅牢の意志を養成するに就ての効能は頗る顯著なものがある。然るに動もすると佛教信者の中には躰などは何うでもよい、早く死んで極樂參りするのが本意であるかの如く想ふて居る人があるが甚しい誤解である、佛教では決して衛生などは何うでもよいとは教へてない、玄奘三藏が釋迦の舊蹟を探られた時お釋迦様が毎日運動の爲に散歩に出られた舊蹟があつたと云ふことである、食物も定量の三分の二に止めて置けどはお釋迦様が常に戒められた言である、それも大抵は粥を用ひられたので粥の効能を説いてある、又入浴の効能や朝起きたら口を漱ぐべきことなども説いてあるが兎に角佛法は不養生でもよいと云ふものではない。日本に於ても最も盛んに極樂往生を勧められた人々



の中で其の先導者として名高い法然聖人は八十歳まで健全であつた、又蓮如上人は八十五歳まで健全であつた、又御開山聖人は九十歳の壽命を保たれた、特に蓮如上人は大坂の御堂を建立なされたのは八十三の御年で御自分が最先に立つて繩張りせられたとある。若し御開山が不幸にして多病であり又短命であつたなら吾眞宗の御宗旨は興らなかつたであらう、又蓮如上人が短命であつたら眞宗は今日の御繁昌はなかつたかも知れない、又法然聖人が同じく多病であり短命であつたら日本に眞宗と云ふ御宗旨がないばかりでなく淨土宗と云ふ宗旨も今以て有るべき筈は無いが幸にも三方とも頗る御達者で且つ御長命で有つたから淨土宗が開け眞宗また興隆して今日の御繁昌を來して居るのである。萬劫にも生れ難き人間に生れさせて貰う

て不養生して早死してよいことではない、特に佛教家が健康の必要なことは明かである。要するに人間萬事健康体が大切であることは恰も家屋の建築に地盤の必要なのと同じことで修養の端緒第一歩は身體を大切にして健康を計ることである。

## 第二 藝能に關する修養

吾々は此世の中に生存して行くのは何か藝能がなければならぬ、全くの無藝無能では吾々は生活することができない。吾々が衣食住を得るの方法は千差萬別で其人に依つて一概には云へぬが、猫や犬は本と野獸であつたのが猫は鼠を取り犬は賊の番をすと云ふそれぞれ一藝一能あるから家畜として家に飼はるゝと同様に碁、將碁、

活花、茶の湯、琴三味線何でも一藝さへあれば世の中の人引ッ張り風にするのだ、そして生活の道は此處に開けるのである。肩や腰を揉む按摩も、鬚を剃る理髪師も、浴客の肩を流す風呂屋の三助も皆藝能に依つての生活である、漁夫としての生活も農民としての生活も亦同様である、故に人類生活に最も必要なるものは何乎の藝能であるが、此れが何より起るか云ふと習練稽古から得らるゝので習練稽古は即ち修養である。人間萬事稽古修練の結果は何でも能きるのであるから子供の時から遊んで居てはならない、何か一つ覺悟なければ世の中に立ち行かれぬのである。

### 第三 知識に關する修養

人は知識を練れば漸々に伶俐になるのは今更云ふ迄もないことで人間は馬鹿でよいと云ふことはないから此知識に關する修養は又大切なことである。山高きが故に貴からず、樹あるが故に貴しとなす、人肥むたるが故に貴からず、智あるを以て貴しとなすと古人は教へて居る通りで人が他の動物と殊なる樞要のものは此知識であると謂はねばならない、人が牛馬の如く大力ある動物を自由に使ふことの能きるのは、何故であるかと云へば人に知識があるからである。要するに人格の中心となるものは知識であつて君臣父子、夫婦兄弟、朋友等の間に於ける道德も知識なければ其の正鵠を保つことが出来ないやうな次第であるから道德の内方には知識を本とする意味もあるのだ。而して此知識は何に依つて發育せしむることが能きるか

云へば教育と経験とであるが教育も経験も一面から云へば修養で、修養の意味を交へない教育も経験もないと謂つてよいのである、それだから知識の必要があると思ふと同時に此の知識に對する修養も大切なことである、青年諸君が今回の講習會のやうに時々會合を企て、色々のことを見たり聞いたりするのも知識に關する修養の一の方法である。

#### 第四 情操に關する修養

人の心は智、情、意の三つから成り立つて居るもので喜怒哀樂は皆情の働きである、此情の働は獨り人間のみでなく他の動物にもあるが慚愧羞恥の情を有つて居るのはただ人類のみである、それであ

るから此慚愧の情のないものは動物と選ぶ處がないのである。獨り慚愧のみでない眞理を愛する情、善事を喜ぶ情、美術を楽しむ情等も人類に限られたものであるから之が發育に努めるのは情操に關する修養であらうと思ふ、それだから吾々は動物共通の情を制して人類特有の情の發育修養に注意せなければならぬのである。それで數々此寺參りをして有難い佛法を聽聞することなどは情操に關する修養の最も良い方法であらうと思ふ。

#### 第五 意志に關する修養

人に働きたいと云ふものが少なくて兎角怠惰になり勝ちなものである、此怠惰心を策勵して各々其の業に勵むのが意志の力である。

或る仕事を企てるのも意志の力であるが其仕事を根氣強く何處迄も行り遂げるのも意志の力である。意志の薄弱な人は色々の仕事を考へ出して自ら之を爲さんと思ひ立つことはあるが之を成し遂げることが能きぬものゝ多いのは意志が薄弱だからである、意志の薄弱な人は半死半生の人と同様、仮令生きて居ても終生何等目醒しい活動的作用あることなく無爲無能に終るのである。吾々の爲さんとする總べての仕事の原動力は此意志で、意志が一步進めばそれだけの活動力が増して仕事もそれだけ進歩して行くのであるから意志の修養は又大切なことである。

## 第六 最終理想の修養

以上陳べ來つた處は部分的の修養に就ての話で主たる結局の修養は更に総合的のものでなければならぬ、それは要するに吾々の精神を善良なる方へ練り固めて行くことで佛教で言へば佛陀、儒教で言へば聖人に仕立て上げるのが最終の修養である。教育學者から見た修養は人格の養成で劣等なる人間を高等なる人間に進めるのが修養である、即ち智情意を圓滿に發育せしめて圓滿完全なる尊い勝れた人間となるのが修養の目的である。道德家の見地から説けば宇宙の最高善に到達するのが修養の目的である。宗教家から云へば自力宗ならば菩提心を起して修行成佛して等正覺の位と成る、他力宗ならば生きて居る間は十惡五逆具諸不善の吾が身ながら他力廻向に催されて轉惡成善、嘘言を言へと云はれても嘘言は云へぬ、悪い事を

せよと云はれても悪い事は能きぬ通れ國家の良民となり、死ねば彌陀同体の證りを開かせて貰ふと云ふのが修養の目的で、吾が眞宗では善知識の言ふことをよく聞いて信するが修養に心掛くる者の何より大切のことであらう。

## 修養の實行法

本講習會の日も追々差詰りましたので修養に關する理論の方は此の位にして進んで修養は如何にして能きるかと云ふ實行法に就て少しくお話することに致したのである。

修養の方法を分けると先づ大膽と共に小心なること、規律的生活を營むこと、眞正の宗教的信仰に依ることの三つになるが之れを更に約めて眺めて見ると

### 大膽にして小心なること

に歸着するのである。大膽と共に小心なると云ふことは、大膽な

るべき所は十分大膽なると同時に小さい心も持たなければならぬと云ふことである。譬へて言ふと吾々が歩くのに右足が必要であると共に左足もなければならぬやうなもので、西へ行くにも東へ行くにも、山を渉るも川を越すも東西南北、四方八方、晴れても降つても左右の足が必要であるが、全体修養と云ふことも此岸から彼岸へ渉ること降つた凡夫が佛になること即ち歩むことなのであるから左右の足に等しい大膽と小心とが一日も離るべからざるものである。それで此の大きな心と云ふものを區分すると色々ある、例へば錢を儲けるにしても百圓より千圓が大きい千圓より萬圓を儲けたいと云ふのが猶更大きい、學校を志すにしても小學校より中學校が大きい、更に大學校は大きい、軍人も海軍ならば東郷元帥、陸軍なら

ば乃木大將、政治家ならば伊藤博文公か桂公か、若くは大隈侯のやうな人にならなければと云ふ心が理想の大きい人と云ふもので、前途に向つて大きい希望、高い考を抱くのが即ち大膽なる人である。

世の中には随分「己れは之れで十分だ」と云つて現狀に満足して居る人があるが之れは志の無い人で決して褒めたことではないのだ、一体、佛法は發心修行と云ふて志を立てるのである、而かも此上もない大きな望を起すのである。菩薩と云ふは勇ましいと云ふ意味で、上菩提を求め下衆生を濟度する勇氣が有る、幾千萬劫生死の海の底に沈むとも勇氣を振つて衆生を濟度して下さるのが菩薩である。また極難信とある佛法を吾一人信じたいと云ふのが志の有る人で、今迄は悪いこともしたが之からは人に笑はるゝやうなことはしまいと

云ふのも志の有る人である。幾度び監獄から出ても復た戻つて来るやうな人は志の立てやうがないので動物と少しも異りがないのである。

動物は現實的に動くもので唯だ食ひたいから食ふ、飲みたいから飲むと云ふに過ぎない、吾々が熱いから扇を使ふと云ふのと同じである。人間も一種の動物であるから時に現實的に動くこともあるが、そればかりでは人の人たる證がない、感じてばかり動くのである。未來の爲に動くのが人の動物と異なる所以である、後生を願ふのは未來の爲めで、秋の収穫の爲めに田草を取るのと同じく行先が大切であるからである。それに就ても大なる志と小なる志とがあるが衆生濟度も五人よりは十人、十人よりは廿人、廿人よりは百人と云ふやう

大きい志を立てる人ほど偉いのであつて、中にも最も大なる志を立てたのは菩薩である。即ち

衆生無邊誓願度。 煩惱無盡誓願斷。

佛道無上誓願證。 法文無量誓願知。

で、所有る衆生を濟度し、所有る煩惱を斷絶し、所有る佛道を修行し、所有る法文を知り抜かうと云ふのが菩薩の志である。十方恒沙の諸佛も亦之れと同様の志を立てられたのであるが、中にも女人正機の志を立てられたのが阿彌陀如來である。去りながら吾々の志が如何に大きくとも小心翼々の心掛けを忘れたら何にもならない、澤山の金を溜あやうと思ふ人ほど一厘一毛に抜目がないのである、佛の證を開かうと思ふたら蚤一疋にも蚊の足一つにも心を着けて居な

ければならないのである。

今より凡そ百年程以前、まだ徳川氏の盛な時であつたが、加賀の大乗寺に萬山和尚と云ふ大徳が居られた、當時宇治の黄蘗宗の本山に鐵玄和尚あり、奈良の東大寺に公慶上人あり何れ劣らぬ歴々の御大徳であつたが、若い頃或る所で三人が落合つたことがある、頃は寛文三年で萬山和尚が廿二歳、公慶上人が十七歳、鐵玄和尚が三十一歳であつたが先づ萬山和尚が口を開いて曰はるゝやう

磐若經に「大願を起さざるは菩薩の道に非ず」とあるが公等孰れも佛弟子の身なれば各々志を立てつらん、いざ語らはずや

と申されたので、鐵玄和尚が手を拍つて喜んで曰はるゝには

佛法渡來して欽明天皇以來既に千餘年、堂宇伽藍や名僧知識に於

ては敢て支那に恥ぢざれと未だ一切經の出版なきは遺憾とす、吾れ一生の間に乞食するも一切經の版木を起さむ、是れ余が願なり。當時では一冊の版木を起すのも容易の事業ではなかつたのである、それを一切經の版木を獨力で起さうと云ふのであるから實に大なる志と謂はなければならぬ、處が此大なる希望は十七年目に終に成就して一切經の版木が出来上つたので今日に至つても黄蘗宗の外には一切經の藏版がないのである。次に公慶上人は

私は東大寺の和尚となつたが、大佛殿が頽廢して居るので之れを一生の中に舊の大佛堂のやうに建立して昔日の面目に復したいのが願である

と云はれたが、之れも偉い志である、寺一ヶ寺も持てない坊主の多



い當時に於て大佛殿の再建と云ふやうな國家的事業を獨力で企てやうと云ふのは實に大なる志であると謂はなければならない。此公慶上人は、源頼光の末孫で頼持と云ふ人が丹波國から出て奈良に住つて居たが其子に七之助と呼ぶ腕白野郎があつて實に親も持て餘して居たのである、或る日のこと附近の子供と石の投げ合ひをして居たが七之助の投げた石が博奕打ちの子に中つたのである、すると其親が大變怒つて頼持の家の立關先へ來て七之助を引摺り出せと怒鳴つたので、頼持も理窟は自分の子供の方が悪いのだから自分が頭を下げて宥めて歸したのである、それが歸へると頼持は七之助を呼んで「毎時も毎時もお前の悪戯は今に始まつたことではないが今日の始末は如何である」と涙を流して切諫を加へた、七之助は當時十三歳

であつたが父の切諫を聞いて何も云はずに頭を下げて居た、そして出て行く姿が何となく氣になつたのが母親で、見ると七之助は一室へ入つて腹を切らうとして居たので母は驚きながら

待て七之助、早まつたことをするではないぞ、死ねと父様が云はれたか、心を替へよと云はれたのではないか、お前が茲で死んだとて何の役に立つものでない、恥の上塗をするだけぢやないかと情の籠つた母の言葉に七之助は死ぬことを止めて、南無觀世音大菩薩の名號を三萬三千三百三十三遍短冊に書いて奈良の二月堂の觀音堂賽錢の函に打込んでの日參を始めた、そして觀音様のお慈悲で日本一の武士となつて親の恥辱を雪げるやうにどの祈願を籠めたのである、すると満願の夜に夢想の告げがあつた

武士では親の恥は雪げぬよ、其の志が有るなら坊主になれ。その観音様のお告げであつた、そこで翌る朝兩親に其の次第を話し、頼んだ處が早速許されたので東大寺に遣られたのである、寺に来て弟子入りする迄は氣付かなかつたが住つて見ると大佛堂の頽廢して居るのが勿躰ないので私かに修理を企てたのである。併し乍らものゝ順序と云ふものがあるので自身に先づ徳を附ける必要がある、徳を附けるには學問をしなければならぬので秘密に學問をして十三歳の時に東大寺の住職となると同時に豫ての希望を發表した、そして山内一同の賛成を得て遙々徳川幕府に行つて頼んだ、最初は役人は誰も相手にしなかつたが度々頼むので或日奉行所へ呼出した、そして大佛修繕の事は今迄數々公議にも上つたがなか／＼の大事業

なので今日迄着手されないのだがお前はそれを成就することが出来るかと訊ねた、すると公慶上人は能きませんと答へた、すると奉行所の役人は能きないことを公議に持出すとは不届至極ではないかと詰責した、すると上人は「天下の人間は皆甚麼惡人でも佛心が潜んで居るものであるから私は自分の志の有る處を佛心に訴へて形の無い佛心を形の有る佛像にしたいと云ふのが私の願ですと答へられたので役人も如何にも出家らしいことを言ふものだと感心して早速許可した。そこで兩親の許へ行つて其の次第を物語つたが其の時兩親は八十幾歳で未だ存命して居たので大變喜んで年だけの寄附をされた、それから奈良を廻つて大阪へ出られたが大阪の治右衛門と云ふ特志家は瓜程の大きさの銅を三千個寄附した、併し之れを奈良へ搬

ぶのは一つの大仕事であつたが上人は一個／＼に「東大寺再建の用材」と書いた札を附けて大阪の町の辻々に落して置いた、すると其の翌る日の朝迄に残らず東大寺の門の内に送られてあつた、盜賊迄も上人の誠心誠意に感じたのである。斯くして上人は七年八月の間撓まず倦まず力を盡されたので漸く牀の修繕が出来上つた、此費用は何の位か、つたかは最近政府が七十萬圓の修繕費を掛けたことに依つても想像が能きやうと思ふ。それで一週間の開眼供養會を終つた時に上人はヤレ／＼之れで安心だと初めて枕を付けて寝られた、それ迄は柱に凭れて眠つたり座つた態で眠つたりして唯の一度も樂々と眠られたことがなかつたと云ふことである、之れが即ち小心翼翼と云ふものである。此大事業を成就したので朝廷では上人の號を

御許しになり寛永寺の宮様は綱代の笠を下さつた、之れは千石千疋以上の寄附で眞に名譽なものである。奈良の領主も自ら大佛供養を行つた。上は朝廷も動かし幕府を動かし下は國民を感動せしめたのも一に上人の熱心の致す處で若し上人莫かりせば明治の初年廢佛毀釋を行はれた時奈良の大佛様も或は彈丸に鑄更へられたかも知れないのである。

## 修養の實行法は

大膽にして小心なれ (續)

釋迦如來一代の御說法は此の「大膽にして小心なれ」と云ふこと

を説き勧められたのである。自力聖道の教も他力淨土の教も戦争も學者も藝術も皆大膽にして小心を要するので、凡そ人間は一切萬事大膽にして小心ならざるはないのである。佛法も發心、發菩提心と云ふが之れが即ち志を立つることである。動物は暑いから動き、寒いから動くが人間も一種の動物なのであるから矢張り此規則は違はずに暑いから人の前でも扇子を遣ふ、膝が痛めば座も崩すが併し之れだけでは動物と少しも違はないのであるから其の志を最も大にして三世十方恒沙の諸佛菩薩のやうにならうと思ふのが人間の尊い譯なのである。

世の中には金儲けの爲めに働かぬ者はないが同じ金儲けをするにしても志の大なると小なるとの相違がある。安田善次郎翁は十六の

時江戸へ逃げて行つた時は百二十文の宿錢が拂へない程の貧乏人であつたが今日では一千万圓以上の大資産家に成つて居る、翁は國を出る時には自分は日本一の大金儲けをしやうと志したから今日の成功を得たのである。阿彌陀如來は盡十方世界の大福長者に成らうと云ふ大きな志を立てられたのである。即ち「我超世無上の願を建つ」と仰せられてある。御開山は九歳の時「弘法の因内に萌し利生の縁外に催された」とある。蓮如上人は五歳の時に既に衆生濟度の志を立てられた。豊臣秀臣は尾州愛知郡の百姓に生れて織田信長の草履取りをして居たのであるが其時から天下を取らうと云ふ志が有つた、之等は皆好い加減なものではないので是非遂げやうと云ふ堅い志である。横濱に平沼專藏と云ふ實業家が在つた、大變な酒飲みであつ

たが三十幾歳の時に感ずることがあつて酒も煙草も茶も止めた、  
 そして七十になる迄毎朝午前四時に起きて水を被らうと云ふ誓を立  
 てられたが死ぬ日迄此志を忘れなかつた、人間は一度誓つた約束は  
 破つてはならない、法然聖人の少し前に覺鑊上人と云ふ眞言宗の大  
 徳があつて後鳥羽天皇は金剛峯寺に傳道院を献納せられた程である。  
 家は平の將門の末孫で代々佐賀の鹿島と云ふ所に住つて居て大變威  
 張つて居た者である、子供は此様子を見て自分の父は實に偉い人だ  
 と思つて居た、或日上納の催促に役人が来た時父は平身低頭して上  
 席に据わした、今迄父程偉い人は無いと思つて居た子供は驚いて兄に  
 其譯を訊ねた、兄は其時剃髪して出家して居たので「役人は父より  
 も偉いので殊に今日は租税滞納の督促に来たのがから」と教へた、

スルト弟は彼の人より偉い人がないかと聞くと兄は順々に教へた、  
 上役人は猶偉い、關白は更に偉く天子様は最も偉いと教へた、スル  
 ト天子様より偉い人は無いかと聞いた、そこで兄は「左うだ、人間  
 界には天子様より尊い人はないが夫以上に靈界に佛が在る、欲界色  
 界無色界の中に最も偉い者は法身毘盧舍那王で之れが最も尊いお方  
 である」と教へた、スルト弟が「其の毘盧舍那王に成れるか」と聞  
 いた、「如説に修行せば成れやうと」答へると、「然らば吾れ其の佛に  
 成らう」と言つた。之れが志の最も大なることであるが、終に十三  
 の年に仁和寺の寛壽大僧正に就て日夜不斷に勉強せられた、四十六  
 歳の時、時の帝は玉の冠を傾けてお譽めに預つた、之れが覺鑊上人  
 の生立ちの話であるが、上人と同じくならなくとも少しでも遠い前

途に志を立つると同時に足許の細かい所に油断のないやうにするのが修養に志す人の最も大切なことである。

### 自己を信ずる事、大なるも大膽なり

孟子は「舜何人ぞ、吾何人ぞ、舜も人なり吾も人なり」と言つたが、禹は春秋の周公で偉い聖人であるが其の聖人と吾は同じ人間であると言ふやうな事を吾々が云へば氣違ひ染みて居るが、假令目に一丁字が見わなくとも「吾れは人なり」と思はなければならぬ、そして世間の人にも夫にも親兄弟にも天子様にも人間らしく仕へなければならぬ。之れが自己を信ずる人と云ふものである。佛教では煩惱即菩提、生死即涅槃と云ふが之れが解を論すれば毘盧舍那と

云ふて天地遍在の大知識が要る、行を論すれば蟻子の須彌山に登るが如くであるが、悟つて見れば吾は佛なりと云ふことである。担化和尚といふ禪宗の大徳は本尊様を引摺り出して斧で叩き割つた、それも良いが風呂の炊き物にして其火で肛門を焙つた、之れは佛も自分も同じものであるといふ禪の見識の處で、修行坐禪して佛になるのではない、吾即佛で心外に佛を見るなどは妄想も甚しいと云ふのである。道元禪師は外道の坐禪、外道の修行と云はれた程で、吾は本來佛なりとの自覺（即ち悟り）を得た以上は佛の行ひとして恥かしからぬやう心掛くるが即ち自己を信ずるに大膽にして而して小心翼翼と云ふものである。眞宗他力の教では佛を信ずると云ふが之れも大膽である。

聞くとは佛願の正機本末を聞いて疑はざるを云ふ  
とあるが其の正機と云ふは悪人凡夫であつて

微塵ほど善くば私が迷ふのに

まるで悪くて私が仕合せ

罪障功德の体となる 水と水の如くにて

水多きに水多し 障多きに徳多し

煩惱の水が直に菩提の水となるのが他力本願の有難い處で、此御本願を信するからは地獄へ墮ちても極樂へ參つても少しも後悔は無いのである。

善人なを以て往生を遂ぐ、況んや悪人をやと御開山も被仰つてあるが、一念歸命の落附きを得るのが大膽で後念相續して王法爲本の

教を守り、社會の人にも譽めらるゝやう、夫に事へ父母を大切にし兄弟姉妹睦み合ふて樂しき日送り目出度き世渡りをなすやう何から何迄氣を付けるのが小心と云ふものである。「一念を大膽に決定して報謝を小心にすべし」と云ふのが他力眞宗の教であるのを反對に取つて、大膽に落付くべき處を之れではなるまいかあれでは悪からうかと迷ふのは小膽と云ふもので、小心であるべき報謝の營みを他力の教だと云ふて忽諸に附するやうでは、決して現當二世を掛けての幸福者とはなれないのである。

修養に志ある者は必ず規律的生活なれ

人間一生五十年と云へば誠に長いやうであるが、本講習會十日間

のお話も愈々今日が最後の一日となつて、之れで皆様とお別れをせねばならんが過去つた後を振り返つて見ると實に短いものである。

人間は定<sup>きまり</sup>ある生活をせなければならぬと云ふことは今更事新しく申上ぐる迄もないが、元來吾々の棲んで居る此の天地間は定のあつたもので、春夏秋冬と四季に分れて、は暑く冬は寒い、八月になれば如何なる年も暑いが春は長閑で花が咲き秋は涼しくて實を結ぶ、太陽の出るのも月の入るのも年々歳々整然と一定の規律がある、斯くの如く日月星辰山川草木の果てに至る迄皆規則正しい中に居て萬物の靈長と云つて居る人間が不規律な暮しをしては濟まないのである。夜は十二時になつても未だ酒を飲んだり高談放笑したりして夜更かしをする、朝はまた十時になつても寝て居るなどは最も不規律

な生活である、宇宙が規則的に出來て居るからには吾々も規則的になけらにやならない。近頃此の衛生と云ふことを大變八釜しく云ふが之れは近年に始まつた注意ではないので、畢竟規律的な生活を營むことが即ち衛生なのである、夜起きて居て晝は寝ると云ふのは衛生に反すると同時に規律的生活でもないのである。飯は食はねばならないものであるが食ひ過ぎては可けない、水でも湯でも酒もで茶でも定<sup>きまり</sup>よく飲んで居れば決して衛生上害は無いのである。釋迦は戒律と云ふことを大變八釜しく説かれたが戒律と云ふのは畢竟定<sup>きまり</sup>良いと云ふことで、五戒八戒十戒百戒百二十戒と種々に區別を立て、説かれてあるが要するに規律的な生活をお勧め下されたのである、それだから區分けをすれば數多いが一年三百六十五日を規律的に暮す



のが戒法の趣意である。世界は規律的に出来て居るが佛教も規律的である。眞宗は無戒名字の宗旨と云ふが成程法としては戒律はないが修養として規律的にする必要がある。眞宗の御門徒では先づ毎朝佛前にお参りをするが之れが即ち定である。釋迦如來が御在世の時に察官（長者の意）にシギヤラオツと云ふ人が居たが、毎朝自分の邸内の泉水で洗面する時先づ東西南北上下に向つて禮拜するのを規則として置かれた、其頃釋迦如來は王舍城に居られても毎朝托鉢に市中を廻らるゝのであつたが毎日シギヤラオツの此の姿を見ない日が無かつたので或日お釋迦様はお訪ねになられた、そして

「お前は毎朝東西南北上下の六方に向つて禮拜して居るが一体何んな神様がお在でなのであるか、そしてお前は何を祈願して居るだ」

とお質ねになると、シギヤラオツは

「イヤ別に相手が在つて拜む譯ではない、又別に私の祈願が有る譯でもないが私の親は一生涯之れを怠らず、私にも斯うせよと勧めましたので、何う云ふ意味か私にも判りませんが親の伝付け通り今日迄續けて居るのです」

と答へるとお釋迦様は「それは良い事ぢや」とお褒めになつた、そして

「お前の親爺は形の拜みやうを教へたがまだ心の拜みやうは教へないから今日私が教へて遣らう」

と次のやうなことを云はれた

先づ東に向つた時は今日一日親子、睦しく暮さうと起誓せよ、

南に向つた時は今日一日、夫婦睦しく暮さんと誓へ、  
西に向つた時は今日一日、師弟の道を守るべきを誓へ、  
北に向つた時は今日一日、朋友と親しく交はるべきを誓へ、  
天に向つた時は今日一日、善知識の御化導に背かぬやう心掛けよ、  
地に向つた時は今日一日、自分は目下の者に憐愍を垂れやうと心

掛けよ、

と懇ろに説き聞かされたことであるが之れが「六方禮經」の大意である。明日と云ふのではない今日即坐である、凡そ修養は洗面、朝飯の如きもので一日も怠つてはならない、そして修養に志を立てなば明日と云はず今日唯今より取掛らねばならぬ「朝顔や其日く」の出来のよさ」親子仲よく暮さうと思ふなら今日一日の心掛けが大切

である、今日一日が積り積つて立派な人間にもなれば良い癖も付く、修養と云つても別に六ツケしい事が要るのではない、朝起きて顔を洗ふのを誰も大義と思はないだらうが、修養も之れと同じく毎日同じことを繰返して行つて良い癖を付けるだけのことである。毎朝必ず佛前に向つて禮拜するのは一種の癖に相違ないが之れも修養の法である明治の以前、元治年中江戸に薬種屋の眞宗門徒が在つたが其處の老人は五ヶ條の家憲を作つて置いた、それは「今日一日のこと」と題するので次のやうなものである。

一、今日一日は三ツの御恩を忘れず不足を云ふまじきこと、

三ツの御恩と云ふのは親、天子様、佛様で不足を云ふのは此の御恩を忘れるからのこと、御恩を忘れなければ不足も云は

れず隨て叱言も出ない譯である。

二、今日一日は嘘言を云ふまじきこと、

劉鄭公が司馬温公に道德の要領を質ねると温公答へて曰ふやう「誠なる哉」と、即ち嘘言を云はなければ足ると云つたのであるが鄭公つま充らぬ事だと思つて歸つたが歸る早々妻子に嘘言を云つて居ることに氣が付いて大に悟る處があつて、力行七ヶ年終に聖人に近いやうになつたといふ話があるから、苟も修養に志有る者は決して嘘言をついてはならない。

三、今日一日腹を立つまじきこと、

之れも中々六ヶしいことである。

四、今日一日人の惡事を言はず自己の善事を語るまじきこと、

夫婦喧嘩も一方の悪いことばかり言ひ立てたり自己の善いことばかり言張るから多く起るもので、双方が自分の善いことを鼻に掛けず一方の悪いことを言はなければ夫婦仲睦しく暮せるものである。

五、今日一日我が生存を喜び、我が生存を喜ぶと共に其の職務に盡すべきこと、

右は今日一日の嗜みにて候。

大抵の人は少し善いことを心掛けてそれが一生を通じてあるなどと思ふから誠に大義になるのであるが、今日一日は一日切りと思ふて暮して行けば習ひ終に性となつて善い人間になれるのである、「六方禮經」にも説いてある通り一日一行と思へば誠に誰にも容易いこ

どになるのだ。曲り易きは蛇の性質であるが眞ッ直ぐな竹の筒に入るれば眞ッ直ぐになると同じで、吾々の心も曲り易いが本性ではあるが規律と言ふ眞ッ直な竹筒に入れば轉惡成善で必ず眞ッ直ぐになるものである。

### 修養に志有る者は眞正の宗教の力に依ること

以上のお話は修養に心掛くる人の外から行ふべきことであつたが、外から行ふと同時に内からも心掛けねばならない、それには眞正の宗教の力に依るより外はないのである。吾々の内心から言ふと阿彌陀様のお慈悲を頂くのである、心のドン底から如來のお慈悲を頂かせて貰ふ人は佛の心其の儘が吾々凡夫の心となつて所謂佛心と凡心

と一体となるのである、見るに付け聞くに付け思ふに付け明けても暮れても一ツも善いことを行ふた例がない五臟六腑が惡の塊で出来上つた吾々凡夫の心と、お慈悲お情の善の塊で出来上つた佛の心とが同心一体となつて離れたいにも離れられぬ不離一体となつた上からには、善の佛様と一所では嘘言も言はれぬ腹も立てられぬ親子夫婦は喧嘩も能きぬと言ふ氣が出て來るのである。之れが即ち修養の道となるので内部から言へば眞正の宗教に依るより外はない、更に詳しく申せば他力の信心を得させて貰ふが何より大切なのである。

(完)

修 養 論 終

大正六年三月十三日印刷  
大正六年三月二十日發行

非賣品

編輯兼 藤谷 惠壽美  
發行者 富山縣中新川郡津幡町

印刷人 山 田 啓三  
富山縣東礪波町四十一番地

印刷所 山 田 活版所  
富山縣東礪波町四十一番地

發行所 中越新婦講習會  
電話八六〇番

339  
397

終